

# いごいのみぎわ

No. 9

2020年5月11日～16日 各家庭でのディポーション用テキスト

[傷のあとはないのか]

あなたには 傷のあとはないのか

足 脇 手にも 隠れた傷のあとはないのか

私は聞いた 世の人があなたの力をほめるのを

私は聞いた 上る明けの明星があなたをたたえるのを

しかし どうしてあなたには傷のあとがないのか

傷もなく 傷のあともないのか

しもべは主人のようになれば十分なのに

私のあとに従う者は足を刺されるはずなのに

あなたは健やかで 傷もない

傷も傷のあともない者が どうして私に従えよう

あなたには痛む傷はないのか

私は天より離れ 傷ついて

死ぬために木の上にかげられた

獐猛なおおかみが囲んで 私を裂き 衰えさせた

しかし どうしてあなたには傷がないのか

エミー・カーマイケル

Toward Jerusalem より

## ■信頼性の訓練（前編）

人が、若い時に、くびきを負うのは良い。（哀歌 3:27）

年をとってからの長所や短所の多くは、若いころの生き方によるものである。信頼されるかされないか、強い性格か動揺しやすい性格か、陽気な人柄か陰気な人柄か、強健か病弱かは、比較的自由な形成期である青春時代に、何を行ない、何を避けたかによって決まってくる場合が多い。神が求めておられるのは、困難な暗黒の日にも雄々しく重荷を負うことのできる人物である。そして、もし若い時にくびきを負うなら、そのような人物になることができる。

与えられた義務（それは、時には単調で、たいくつなものであるかもしれない）を、責任をもって遂行するようであれば、人生のきびしい現実には立ち向かうことはできない。まして、神に喜ばれる奉仕ができるはずはない。時間を浪費し、仕事をまじめに行なわず、注意されても手を動かそうとせず、永遠の神のみことばを学ぶことも、先人の残してくれた知識の宝庫を探ることもせず、自分の能力を十分に生かして活躍することもなく、ぼんやりと日を過ごすことに満足する—このような生活を許してくれる親がいるなら、それは決してほんとうの親心というものではない。なぜなら、その結果、私たちは、信用を失い、仕事に飽きやすい人間になってしまい、しっかりした一人前のおとなになれないからである。

若いときにくびきを負うとは、若いうちから、たといどんなに小さな義務でも、与えられた務めを喜んで果たし、人が見ていないときにも、課せられた任務を良心的に最後までやり通し、過ちを犯したときには進んで懲らしめを受け、それによって教訓を学び、報酬を求める心からでなく愛の心から常に奉仕する、ということである。若いときにくびきを負うなら、年をとってから重荷を負うことができ、それによって神の栄光をあらわすことができる。

少年時代にベツレヘムで羊を飼い、のちに王となったダビデの生涯は、この信頼性の訓練のすばらしい実例である。このことは、ダビデばかりではなく、ヨセフ、モーセ、ヨシュア、サムエル、エステル、パウロ、そのほか数え切れないほど多くの人々の人生の準備期にも見られるが、ここでは、ダビデを取り上げるだけで十分であろう。

彼は、最も根本的なもの、神に用いられる人に不可欠のもの、すなわち神を愛する心を備えていた。全能なる神は、イスラエルの初代の王サウルをテストした結果、サウルが信頼性に欠け、困難時における忍耐力もないことが明らかになったので、サムエルを通して言われた。

「主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる」（1サムエル 13:14）。その後またサムエルを通して言われた。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり…そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ」（15:22, 23）。サウルの心が自己中心的であり、利己的であったため、彼の生涯もその道に従っていった。

ダビデは「わたし（神）の心にかなった者」であった（使徒 13:22, 詩篇 89:20）。イスラエルの士師であるサムエルは、エッセイの息子のひとりを次の王とすべく油を注ぐために来たとき、ダビデの長兄エリアブを見て、その外観と態度から非常によい印象を受け、「確かに、主の前で油をそそがれる者だ」と思った（1サムエル 16:6）。それに対する主の答えは、非常に意義深いものである。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る」（7節）。私たちは人を見るとき、善良そうな顔、りっぱな背丈、洗練された物腰などを見て感銘を深める。これはもちろんよいものには違いないが、神を愛する心の代わりにはならない。神は、八人兄弟のうちの末の子のダビデがサムエルの前に立ったときに、初めて「さあ、この者に油をそそげ。この者がそれだ」と言われた（12節）。（次回に続く）

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第十二章「信頼性における訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。